

中等教育英語科指導法における、英語・文学・性教育のクロスジャンルの探求

—大学学部教育における実践を通して—

千代田 夏 夫 [鹿児島大学教育学系 (英語教育)]

College students' attempts at making a cross-genre class: English/literary/sex education at junior high school

CHIYODA Natsuo

キーワード：中等教育指導法、英語教育、高等教育指導法、文学教育、性教育

1. はじめに

TOEIC対策等、就職活動をも視野に入れたいわゆる実践的な英語指導法が導ばれる今日の英語教育において、ともすれば文学は非実利的なものとして教材から外されがちである。しかしながら Collin&Slaterも述べるように、外国語教育において「学んでいる言語を使用する国・地域における社会的相互作用の諸パターン」¹に親しむことの重要性とそれに対する習得者側の欲求は強いのであり、グローバル化が年ごとに強調される我が国の文部科学省の提言においても、文学の重要性は確認できるところである²。本稿では「リベラルアーツ」教育の重要性も叫ばれる今日の教育現場における教材としての文学の可能性を、英語教育の現場を想定した上でクロスジャンルというアプローチから探りたい。その際のジャンルとは英語教育、文学教育そして性教育である。

実践的データとして用いるのは筆者が担当教員として開講した鹿児島大学教育学部における超学部科目「英語科指導法II (文学)」(2016年度前期開講)³の次第である。この資料を分析しつつ、中等教育英語指導法を「舞台」とした、上記三領域のクロスジャンルの方法論を探ってゆく。(そして本授業は常に、大学学部教育という高等教育における中等教育指導法の指導という入れ子構造とともにあることに留意したい。)2016年度前期当該授業の受講生は教育学部生15名法文学部生11名計26名(男性9名女性17名)、学年構成は2年生5名3年生13名4年生8名であった。また卒業論文領域としてアメリカ文学を専攻している4年生は教育学部の男子学生2名であった。

本科目は中学校学習指導要領および中学校学習指導要領解説外国語編⁴に基づく中学校3年生(男女各20名計40名の混成クラス)の英語の授業を想定して教材を選択し学習指導案作成を経て模擬授業を行うものであるが、その学年設定については中学校3年生というアイデンティティ確立において「性」がとりわけ重要な意味を持つ時期に、その人間の営みとして比類ない重要性を有する性の問題に恥じらうことなく堂々とかわり合う姿勢を求めるものである。文部科学省からは「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」(27問文科初児生第3号)⁵が2015年4月30日に出されている。2016年4月から施行された障害者差別解消法⁶においては性同一性障害も

障害に該当し、それに関連した種々の動きの一として、小中学校における男子トイレの全個室化が、実施後種々の問題は個別に生じているとはいえ、進んでいる⁷。

性の多様性への学びがグローバル教育の求める「多様な他者」への理解と寛容とアナロジーをなすことは言うまでもない。アイデンティティと性の問題は実際の受講者である大学生においても同様であり、いまだ初等中等高等教育における性教育の貧弱が見られる日本の教育現場の実情に鑑みて、意義あるものとする。2015年8月一橋大学法科大学院において恋愛感情を告白した同性愛者の学生がLINEでその内容をアウティング（他者の同性愛指向を本人の了解なしに社会に広く暴露すること）され授業中に自殺するという痛ましい事例が起こり、両親が大学と同級生に対して提訴を起こしていたことが2016年8月5日明らかになったのは記憶に新しい⁸。この際も大学側は同性愛と性同一性障害を混同して当該学生の助言にあたるなど、初等中等高等の等級を問わず教育現場における性の多様性への理解はいまだ甚だ貧しい。本科目は中等教育における上記三分野のクロスジャンルのみならず、高等教育におけるジェンダー・セクシュアリティ問題の学びという側面も有するのである。

2. 実際の指導—オリジナルとリトルド、短編と長編、韻文と散文、一部と全編

本科目の眼目の一点目は「受講者自身による教材選択」にある。教員による複数（2016年度は二例）の作品例示とそのメリット・デメリットについての受講者全員による議論を経て、グループごとに模擬授業の教材となるアメリカ文学作品を探索する。二点目は「ジェンダー・セクシュアリティ」の視座からのアプローチが条件となるということである。これは単に「セクシュアル・マイノリティ」の問題のみならず結婚や出産等、ひろく「性」の問題としてとらえられないしとらえる必要があるトピックが受講者の身近に散在していることへの気づきを促す意図もある。

2016年度は、例年通りまずF. Scott Fitzgerald(1896-1940) *The Great Gatsby*(1925)の冒頭1頁半をオリジナル⁹、retold版の新版¹⁰旧版¹¹ともに検討した。教材として扱う文学作品はオリジナルかretoldか、散文か韻文か、長編か短編か、またその一部か全編か等の議論の、最初のたたき台としての本作であるが、この作業については拙稿¹²を参照されたい。そののち実際の学習指導案作成と模擬授業の前の助走として、今年度はRaymond Carver(1938-88)の極めて短い短編“Fat”(1971)を教材として教員から示し、実際に模擬授業を行う各班で学習指導案を作成してもらった。本作は勤務先のレストランにやってきた奇態な客によって、妊娠中とも思われる語り手の心理および恋人との関係に変化が生じるさまを簡潔平明な文章で書いた作品である。この活動を通して学習指導案の作成方法やアメリカ文学を教材とした場合のアイデア案出のためのブレイン・ストーミングといった外枠固めを行う。そののち本年度は以下の作品が選択され（時系列順）、それぞれ学習指導案とともに模擬授業が展開された。ローテーションを3回回したことによって、それまでの反省及び評価事項が反映される作品選択の変化にも注意したい。なおO. Henryの出版年については当該作品収録短編集の発刊年を示した。

2.1. O. Henry “After Twenty Years” (1906) — 「掘り下げない」効用

O. Henry (本名 William Sidney Porter, 1862-1910) の良く知られた短編である。全五時間を想定した計画に基づいて模擬授業では第二回目が行われ retold 版¹³がテキストとして用いられた。警察官 (Jimmy) と指名手配犯 (Bob) として二十年ぶりの邂逅を果たした旧友二名の「人情噺」の最たる本作は前者から後者への書簡で終わる。それを踏まえて本時のタスクは四技能「書くこと」「聞くこと」「読むこと」「話すこと」に「指導の重点」を置いた「Jimmyになりきって Bob に手紙を書こう」というものであった。中学3年生の英語力にふさわしいウェルメイドな作品ではあるがジェンダー・セクシュアリティの視座からのアプローチという点では難航が予想される。本グループは両者の関係性が煮詰められる「手紙」を想像力涵養の場として設定し、拡大解釈可能な“I love you”等のフレーズを生徒役の学生が示すことによって、男同士の友情という homosocial な関係¹⁴—近年では bromance という語も現れている—の典型の、homoerotic な面を映し出すことに成功した。そのような手紙に対する周囲の「中学生生徒」からのからかいの声までが織り込まれており、教師役学生はそれを love という語の広さ深さを説明することで収集するという点は高く評価される。まだまだ偏見が強いがゆえにいきなり提示すれば教員側にマネージ不可能な拒否反応が現れる事態も予測される同性愛マターについて、あえてそれを掘り下げるのではなく love という語の広さに回収するというのも教育手法の一であるという好例であった。

2.2. “The Retrieved Reformation” (1909) — 「物語のこれから」と結婚

往年の金庫破りが幸福な結婚の希望を捨てて金庫に閉じ込められた子供を救おうとする O. Henry の佳作である。作家特有の人情噺の系列と言えよう。全9時間の9時間目、テキストは教師の作成した retold 版を用いる。独自の retold 版を作るという試みは、実際に模擬授業で用いられたそれを見てもまずはその志を評価すべきものではあるが、やはり困難を伴うものであることを指摘したい。本時のタスクは主人公カップルの「Jimmy と Annabel を中心に、物語のこれからを考えよう」というものであった。テキスト主義に基づいた文学研究においては作品にかかれていることが全てであり、書かれていない「物語のこれから」を議論の俎上に上げることは危険なこととされるが、本授業の目的である中学3年生の英語の授業を舞台に、英語教育文学教育・性教育のクロスジャンルを試みるという原点に鑑みれば、厳格な文学「研究」の手法にこだわる必要はないという結論に、筆者と受講者で達した。指導案によれば「sexuality の観点から」ジミーとアナベルのこれからを考察させるということであったがその読み込みは作中に手がかりとなる記述がないため不首尾に終わった。いざ自分の過去を暴露することとなる金庫破りを行おうとする際に、ジミーがアナベルの胸のバラのつぼみを要求するという場面は象徴性に富むが教師役の学生にもその個所を説明する準備ができていなかった。テキストに直接は書かれてはいないもののこのバラが一種のプロポーズの証だったのではないか或いはこれで破たんする彼女との関係のよすがにせめてバラを一輪もらったのではないか等の発題が担当教員の筆者からなされた。しかし結局は金庫破りの過去がお目こぼしとなるハッピーエンドにおいてこの両者の「これから」に「結婚」というテーマを積極的に絡めたことは評価できる。セクシュアリティと

いう語の使用はこの指導案の記載の場合適切さを欠いたが、結婚もジェンダー・セクシュアリティの重要なテーマであり、その意味では十分に活用可能な教材となりうる作品である。なお“The Caballero’s Way”の段でも論じたが、本作でも題名の解釈が問題となった。直訳すれば「ただされた改心」、一種の撞着語法のようにも読まれ、かつ誰が何を改心したのか、刑事かジミーか等、授業展開の余地は十分にある。O. Henry 作品の原文の難解さとそれゆえの面白さは拙稿¹⁵で述べたが、それと同様に題名も一筋縄では行かない文学的鑑賞に耐えうる力があるものが多い。本グループは題名にも目配りを行った点で評価できる。

2.3. “The Gift of the Magi” (1906)—スキットの活用

O. Henry の広く知られた短編、これをretold 版¹⁶をテキストとして用いる。全5授業の5回目、最終回である。指導案上の「本時のタスク」は「スキットを完成させよう」というものであり、クリスマスプレゼント交換の場面を二者が演じる戯曲形式の例が示され、それを本作の内容に基づいて書き換えて、さらにはそれぞれの状況や好みに応じて実際に生徒役/本グループ以外の受講者に演じさせるというものであった。オーディオ資料を用いることでの立体化ということ述べたが、これも紙テキストという二次元を三次元に立ち上げる文字通りの立体化であり、クラスも沸き立って王道ながらやはり効果は抜群である。このいわば寸劇による立体化はクラスの活気のみならず上述の「それぞれの状況に応じて」という場面でジェンダー・アプローチと交差する。つまり相手が男性ならばどのようなものを選ぶか女性ならばどのようなものが好ましいかという「常識」を、一度疑義に付して、議論を行うのである。それは同時に作品中の女性＝髪飾り、男性＝時計という現代にも通じるジェンダー区分の見直しと表裏一体をなすものであり、さらには女性の髪象徴性、時計の男性的象徴性というより高次の文学的議論へと自然に発展してゆく。本授業における中等教育法と高等教育における議論の二重性についてはかねてより述べているところであるが¹⁷、本グループの模擬授業においてはその両者の交錯が自然に行われたことを高く評価したい。

2.4. *The Scarlet Letter* (1850) —「あらすじ」作成における危険

Nathaniel Hawthorne(1804-64)の代表作たる長編である。本作の主題は指導案にあるように「姦通の罪」であるから、まずは本授業の目的に適った作品選択といえる。全15回最終回15回目の授業である。retold 版¹⁸を用い全15回をかけて物語終盤の牧師の胸の内の開陳というクライマックスの場面一本グループの用いた retold 版では9章全部ということになっている一を扱う。のちに扱う *Daisy Miller* については物語の四分の三ほどを扱ったところで終末まで行かないという半端さを難じ全編を用いることを主張したが、本作の場合は大長編であり、retold 版では1章にそのクライマックスの場面がまとまっているゆえに適切な選択といえる。指導案記載の「文学は社会を反映する機能を持っていることや、世論によって作り出した社会的規範や「当たり前」が、それから外れた人たちを苦しめる場合が往々にしてあるのだということ学ばせたい」という「指導観」も適切であろう。そのもとでの「登場人物の心情を読み取り、ジェンダー・セクシュアリティの問題について考えを深めよう」と

いうタスクおよびワークシートの最終設問「ディムズデイルの罪の意識はどこからきたものか」に至る四つの設問も慎重に考えられたものであり評価できる。本グループの場合、長編の一部を *retold* で読むという性格上、「あらすじ」の重要性が増す。そして本グループの一番の問題はこのあらすじ作成にあった。すなわち「彼（ディムズデイル）はついに処刑台上がり、7年前の罪を皆の前で告白した」という部分である。用いられた *retold* 版そしてオリジナルともにこのクライマックスにおいて牧師は「7年前の罪の告白」など行っていない。もとへ、行わないことにこそホーソン文学の真骨頂たる「曖昧さ」の奥義が示されているのである。姦通というテーマへ急ぐ余りに教材となる文学作品の読みを誤ってしまったことは厳に戒められるべきである。同様の誤りは本作に関して昨年度も起こっているものであり¹⁹、文学作品を教材に使用することの難しさを、この事例はあらためてよく示すものと言えよう。そして授業では *retold* 版を用いるにせよ、教師側は原文を読み込んでいなくては授業教材に扱ってはならないという主張を重ねて行いたい。

2.5. Ernest Hemingway “The End of Something” (1925)—同性愛の物語

Hemingway(1899-1961)の短編群のうち男性同性愛の視座からの読みについて、研究者間でも議論の多い作品である²⁰。全9授業の7回目、テキストはオリジナルを教師側が独自に作成した *retold* 版を用いる。マージョリーとニックの会話から成るきわめて短い作品であるが、その間に男性の、女性からの心離れが読み取られる。本グループは「2人の関係性がなぜ悪化したのか考えよう」というタスクのもとニックのセリフに“I know it”と繰り返すマージョリーの応対に注目することから「男のプライドが傷つけられている」等のコメントを生徒から引き出し指導案上の「日常生活の中で、「男だから」「女だから」といって無意識に区別していること、されていることはないだろうか？」というテーマのもとに授業を運んだ。ここから先は男女による「常識的な」持ち物等の色の区分から男性はなぜスカートをはかないはけないかという身近な事例が受講者全体から上がり、盛り上がりを見せた。後者はジェンダー研究における異性装の議論、また異性装を問題とする強制的異性愛²¹の問題にもつながるものであり担当教員である筆者からそれらの語の紹介と説明がなされた。これは中等教育法を扱いながら高等教育における「性教育」が可能な一例である。本グループが注目した「繰り返し」はモダニズム文学の特徴であり、同性愛関係を濃厚に漂わせる本作から上記の典型的な男女ジェンダー論を引き出すことは実は難しい。しかしヘミングウェイと時代背景の説明において20世紀初頭のアメリカにおける白人男性の男らしさへの不安を専門家の研究論文²²を引いて説明することで、文学に見られるジェンダーの揺らぎを性教育への道筋の端緒とすることの可能性をよく示した。なお教員独自の*retold* 版を作るという試み自体は“The Gift of the Magi”を扱ったグループ同様、大いに評価されるべきものではあるものの、教員側に英語力文学読解力はじめ総合的に相当の力量がなければ文学作品を扱うという意義を根底からゆるがせにする危険性ははらむものである。慎重であるべきであろう。

2.6. Daisy Miller (1878)—欧・米の区別

難解さで知られるHenry James(1843-1916)の比較的読みやすい中編であり、全7回授業の6回目であ

る。指導案の「本時の目標行動」に示されるように本作は「女性のあるべき姿」に抵抗し死をもって罰せられた少女デイジー・ミラーの物語であり、女性らしさとは何かという問いをもって、基本的なジェンダー・アプローチにまずは最適なテキストといえる。テキストは *retold* 版²³を用いる。模擬授業の中心はタスク「Mrs. Walker (筆者注：ヨーロッパ滞在の長いアメリカ人) が Daisy (筆者注：渡欧したばかりの裕福なアメリカ人少女) を批判した理由を考えてみよう」への回答をワークシートに記すものである。時代背景や異なる国・文化によってそれ自体が変化する「女らしさ」に焦点を当てそれに適切な作品をもって過不足ない授業進行が見られたが、文学教育の視座から見ると、本作について「全編を扱わない」という姿勢の適切さの如何が問われる。あらずじとして説明は行うにしても、7回という数をとるか *retold*版を用いるのであれば、緩急をつけて時間のコントロールを行いやはり全編を読みたい。またジェンダー規範には階級が大きく作用するという点が本グループには欠けていたので筆者によって補足説明された。本作はジェイムズの国際関係ものの代表作である²⁴。「欧米」と一言で言っても、アメリカとヨーロッパは今日まで諸般において種々の対立項が成されているのであり、グローバル化に多様性理解というアプローチから対応しようとする本授業の態度に照らし合わせても、本作の教材としての可能性はまだまだ掘り起こされるべきであろう。その際にジェイムズ作品の英語の難しさの扱いは問題となるが、まずは本グループのように適切な *retold*版を用いることがひとつの契機となろう。また本作は Daisy、Winterbourne 等登場人物の名前に象徴性が高く込められている事例でもあり、文学における名前という重要なテーマに実地にあたるという点で文学教育の面からも重要である。

2.7. “The Caballero's Way” (1907)—romance と女性蔑視

O. Henryの短編では日本ではやや知名度が低く、かつ珍しく後味の悪い作品として異色のものである。全15時間計画の15時間目、テキストは教員の作成した *retold*版を用いる。その最終授業におけるタスクは「物語のタイトルが指す意味を考えよう」というものである。Caballeroとはスペイン語源で「騎士」の謂であり、ヨーロッパ文学史における重要な騎士道物語の系譜がうかがわれる点でも、扱いには慎重さと準備を要する。無法者でありながら女性へのやさしさをもって一種の騎士道の具現者を思わせるシスコ・キッドは、しかし最終的に自分を愛する女性を自分自身に仕立てて敵に討たせ自分はのうのうと生き延びてゆくという、誠に騎士らしからぬ振る舞いをもって物語は閉じられる。日本人に親しまれてきた人情斬のO. Henryの作風はここにはなくそれゆえに「騎士の道」という題名をどうとらえるかが問題となるのである。このタスクと題材を受けて本グループが展開した以下の読みは相当に次元の高いものであった。すなわち、そもそも騎士道物語という女性を神聖視するヨーロッパ中世からの長い伝統²⁵は女性蔑視と紙一重なのであり、そのヨーロッパの伝統を誇大にパロディ化して示すことでその問題性を白日の下にさらしているというのである。この読みは高等教育における、フェミニズム・ジェンダー研究に拠って立つ文学教育の一端を示したものであった。なおJamesの段でみたように、ここでもヨーロッパとアメリカという異種性の認識が肝要となる。なおヨーロッパ文学の伝統において騎士道物語と異国趣味は不即不離の関係であるが本作においても舞台

はアメリカ・メキシコ国境近辺に設定されているという点に、アメリカにとってのもう一つの異国メキシコをはじめとする中南米という文化的地図も確認出来た意義は大きい。本グループは教育の機会均等を謳った教育基本法4条にも冒頭言及したが、性の問題を扱うに際し、法による根拠という一種の「権威」を示すことは安心感を与えることにもなり、重要なことであった。なお本グループの授業を通して文学を扱う際の姿勢として、テキストレベルから離れない＝英語から離れない/原文に忠実に従うのか、内容により大きく焦点を当てる＝必ずしもオリジナルにこだわらずともretoldで対応するのかという選択の問題が改めて浮上した。なお拙稿においてMark Twain作品における南部騎士道とロマンスの親和性の出現について述べたが²⁶、アメリカ文学においてromanceと騎士道の問題は思いのほか広く見られるものといえよう。

2.8. “Cat in the Rain” (1925)—ロマンティック・ラブ・イデオロギーの理想と現実

Hemingway初期の傑作短編である。倦怠感のうかがわれる夫婦の会話から成るごく短い作品であり「二人の態度や様子から関係性を考えてみよう」という本時のタスクは文学教育における基本的姿勢といえよう。全5授業5回目の授業でテキストはオリジナル²⁷を用いる。ワークシートには3つの設問が用意されるが第三問「妻/夫にとってcatとはどのような存在だと考えられますか」が最も重要であろう。恋愛に基づく結婚によって社会的に結びついた「夫婦」が子を設けることで「家族」をなすというのは近代社会における家族像の典型でありロマンティック・ラブ・イデオロギー²⁸の明快な表象といえる。その点でcatを赤ん坊と読む本グループの視座はジェンダー・セクシュアリティからのアプローチとして基本的なものである。その猫が作品最終盤において子猫からどっしりとした成猫へと変化していることに、美化された幻想の赤ん坊から、ときにfemininityの重要構成要素である美を損なうものとしての子供というリアリティを読み取ることは可能であるという指摘が筆者からなされた。短い髪を伸ばそうかという妻が「男の子みたいに见られるのが嫌になったの」という台詞、夫婦2名に介入する他者としての猫（子供）およびホテルの主人（婚姻への攪乱要因）などジェンダー・セクシュアリティの視座から読むテキストとしてまことに重要な要素に満ちた作品である。

2.9. “Story of an Hour” (1894)—フェミニズムの複雑性

Cate Chopin(1850-1904)の大変短い佳編である。昨年度は同じ作者の“Désirée’s Baby”と二作選択されたためその文学性の違いが議論となった²⁹。全6時間の2時間目を模擬授業としオリジナル³⁰をテキストとする。夫の事故死の報（実は誤報であった）を受け嘆き悲しむうちマラード夫人が気づくsomething、それは家庭に縛られる女性像からの自由への兆しであったのであるが、本時のタスク「somethingが表すものについて考えよう」はアメリカ文学においてこの名状しがたいsomethingが多くの作家の作品において重要な位置を占めることから誠心的に射たものといえる。本グループが配布した参考資料にも諏訪部浩一の論が引用されるように「女性の解放の問題が提起される一方で、それが必ずしも明確なフェミニズム的告発としてではなくより複雑であいまいなものとして示されている点も特徴的である」³¹ゆえに、現代まで通じる問題系をはらんだテキストとして教材使用に耐えうる作品で

ある。実際の模擬授業では「それまで気づいていなかった抑圧」等がsomethingの指示内容として提示され、「自分にとっての幸せを自覚することの大切さ」と「その自覚の機会がなかったことへの改悛」へと議論は広がりを見せた。なおかつ代表作*The Awakening*(1899)同様、最終的には女性主人公が死ななくてはならないところに、作家のフェミニズムの限界、上掲の諏訪部の論によれば「複雑さ」が示されるのである。本作はまずその短さとまとまりの良さに英語教材としての高い可能性を秘めており、かつ19世紀末南部アメリカ上流階級の女性という作家の特殊事情は、昨年度までの事例でも示されているように地理・世界史といった社会科科目とのクロスジャンルの可能性³²を大いに示すものである。なお本グループはYouTube上の朗読音声³³を授業中に流し、視聴覚面からのアプローチを行ったことは、技術面での立体化の試みとして高く評価できる。

2.10. “A Day’s Wait” (1933)—ストリップ使用の効用

Hemingwayの佳作である。全3時間の冒頭1時間目の模擬授業、オリジナル34を用いる。この授業でも“A Retrieved Reformation”や“The Caballero’s Way”のケースと同様、「まず導入において本作品のタイトルの持つ意味について考えさせ、作品の内容に興味をもたせる」と指導案に記載される。そのうえで本時のタスク「物語の冒頭を演じてみよう！」へと展開されるのである。教師役学生はまず作品タイトルを音読し、音からスペリングを考えさせる。waitにはweight等の同音異義語があり、それなりに文学的には意味の通じそうな気配である。そして正解を日本語に訳し演じさせる。ここでは各グループごとに割り当てられた段落をペーパーサート（ママ、和製英語である。paper puppet theatre、紙人形劇のこと）演じるのであるが、切れ切れに配布されるため前後の脈絡がつかめない。他グループの演技を見て臨機応変にそれぞれの解釈と演技を変え、全体として一貫性のある一つの話とするという試みは非常に独創的であり、かつゲーム性の高さから生徒の関心を引くと思われる。作品を一度分断することでHeが誰かわからなくなることがこのゲーム性を支えている。父親が息子を看病している話であるが、そこに医者が絡むことで子供の看病という女性的なイメージおよび医師という男性イメージをどこまでその通念から切り離して、現実に眼前で起こり自分のグループへと迫りくる芝居の筋に合わせるか、男性（父）女性（母）どの紙人形を用いるかという手法は非常に面白い。指導案の「単に二元化された生物学上、社会上の性役割に固執しない自分らしいあり方について考えさせる」の記載をまさしく実地に移した優れた模擬授業と指導案であった。もともときわめて短い作品である上にこれはHemingway短編の特色でもあるが一登場人物が少ないため、三回という少ない回数計画でもその少なさがスピード感につながり、良い結果を生むことが期待できる。

2.11. “Indian Camp” (1925)—ディベートの利点と危険

Hemingway短編の最高傑作のひとつである。全2授業2回目を想定した模擬授業でオリジナルテキスト³⁵を用いる。本時のタスクは「ディベートをしよう」である。ディベートに関しては試みとしては面白いものの実行に移すにはルールに通暁している必要がありそれなりの困難を伴う旨2015年度本科目における事例に寄せて拙稿で述べた³⁶。本グループは昨年度の例に比して高知県教育センター

による体系だったガイドライン³⁷を用意しており、ある程度の機能を見ることができた。ディベートの論題は妻の帝王切開手術中に自殺した夫の死を容認するか否か、である。夫婦、出産、男らしさ女らしさ等のジェンダー視点のモチーフが集中した作中のハイライトであり、まずは良い選択であるといえよう。肯定派否定派それぞれの主張において実際にそれらの視座を交えて充実した議論が現れた。しかしディベートである以上勝負とまでは行かずとも総意は出さねばならず、本グループの指導案上それは「クラスでの意見をまとめる」と記載される。「足を怪我しているという男らしさの損傷による誇りの喪失状態に加え、あらたに子供を得て妻子を養ってゆくのがインディアン文化の中では不可能に近いがゆえに夫の絶望を理解できる」との立場から夫の自殺にクラスとしては肯定するという結果となった。筆者からはさらに「近代医学という白人文明によるインディアン文化への侵食が、白人男性医師によるインディアン女性への麻酔なしの局部手術という形で成されている、いわば「二重のレイプ像」として映る可能性³⁸が補遺として述べられた。ここで難しいのが科目は問わず中学三年生の授業において自殺を肯定する論調を「総意」として出してよいものかということである。筆者は2013年に記した拙稿において“Indian Camp”の用例を引きつつ「死、性など通常の言説ではタブーとされがちなものが主題となるのが文学であり、それらについて考察を行う好機を得ることこそ、英語の授業に文学を取り入れる利点である³⁹」と述べた。文学すなわち虚構に英語という外国語をもって接する、すなわち二重の距離感が一種のバッファーになるであろうという主張であるが、ディベートというのは上にみたように何らかの結論を出すことを到達地点とするものである故に、そのような安全弁たる距離感が失われる危険がある。これはまさに上記のようにジェンダー・セクシュアリティ問題が多元的に交錯している夫の自殺の問題は教材としての適性に富むという期待とその期待に応えた充実した議論ゆえの結論であるがゆえに、授業参加者一同筆者も含めて思わぬパラドックスに唸ってしまったところである。本作品は英語の平明さ、短さそして主題からいっても中学3年生にオリジナルで触れさせるに格好の教材でありまたディベートというアプローチも可能性に満ちた技法であるがゆえに悩ましい。ここでは“Indian Camp”の教材としての可能性の高さとディベートの利点を個別に主張しつつ、後者を持ち込むには作品とその論題を、クラス展開のシミュレーションの上熟考する必要があるということを強く述べたい。

2.12. “Indian Camp” (1925)—反・多様性のデモンストレーション

再びの“Indian Camp”である。全3時間3時間目、テキストはオリジナル⁴⁰を用いた。本時のタスクは「作者の考えを理解し、自分の考えを見つめなおそう」という本時のタスクの「作者の考えを理解」するというのは今日の文学教育において議論の多いところではあろう。本グループは作者の自伝的要素を積極的に読み込むという謂で用いたものらしく、ヘミングウェイの幼少時における女性装、過剰なマッチョ示威等を、専門家による1920年代アメリカ文学における男らしさの自信の揺らぎの議論⁴¹と絡めてジェンダー・セクシュアリティアプローチを前面に押し出した点は評価できる。中学三年生にとって切実な問題である「性」についてその多様性を学ぶことによりグローバル化対応を目指す本授業において、その多様性を否定する結論にだけは持って行ってほしくない

というのが教員側から示された条件であった。畢竟他グループに見られるように固定化されたジェンダー観の見直し等に模擬授業としてのクラスは落ち着くことが大多数を占める中、本グループの白眉はあえてその流れに対抗する意見を、ある生徒の意見として提示したことである。すなわち2015年度の合衆国最高裁判決に代表される同性婚容認や渋谷区等の条例も引きながらの様々な恋愛のかたちの理解と容認について、それでも未だ根強い抵抗感をあえて模擬授業で生徒の反応として示した点である。提示されたのは「現在の日本で同性婚を認めることは喫緊の問題である少子化問題に良い影響をもたらさない」という意見であった。このような意見はジェンダー・セクシュアリティ研究やクイア・スタディーズにおいては強く反論すべきものであるが、まずは模擬授業という場で表面化したことを肯定的に見たい。そのうえで筆者が反論として述べたのは一生徒役また他の受講者からは意見が出なかったので、同性婚容認と少子化問題には合理的な因果関係がないこと、子供を持つことを結婚の至上命題として生理学的に不可能とされる同性婚を否定するならば、様々な事情で「子を持ってない」異性愛者のカップルに対しても不妊治療や養子縁組等を法的に強制しなくては論理的な整合性がとられないこと、また残念ながら広く共有されている「同性愛＝子孫を残せないから「不自然」というロジックは、異性愛カップルの大半がその生涯で行ううちの性交渉のほとんどを避妊をもって行っていること、すなわち「(次世代再生産を目的としない) 遊戯としての性」こそが「ヒト」の特殊性であるということなどである。あらかじめ性の多様性を容認するという枠組みの中で動いている授業であるがゆえに、きわめて寛容なしかし机上の空論に過ぎない点も否めない「リベラル」な視座のみが現れる中で、人々が皮膚感覚として有している抵抗感を表出して見せたことについては高く評価できる。そのあとはクラスを統括する教員側の対処の重要性が問題となる。なお本グループにおいては作者の自伝的要素ばかりに内容が割かれかつそれを強調しすぎ、実際のテキストに入ることがほとんどなかったことが惜しまれる。まず第一には英語の授業である以上、英語のテキストである文学作品自体と格闘する基本姿勢を確認したい。

2.13. “Margo” from *A New Path to the Waterfall* (1989)—散文的アプローチと韻文的アプローチ

今年度初めての韻文作品、プレ指導案の際に用いた“Fat”の作者であるRaymond Carverの作品である。全2時間2時間目の模擬授業でテキストはオリジナル⁴²を用いる。Tug（引き具）とMargoという男女カップル、やがて女性はCargo（積み荷）となり、別離を経てふたたびもとのMargoになるという15行からなる短い詩である。文学作品における人名の象徴性についてはDaisy Millerの段で触れたが、本作はより端的にそれを示している。本グループも主導権を握る男性とそれに引っ張られてゆくだけの女性という古典的ジェンダー観をまず読み取りそのうえで、「MargoとCargoを比較しよう」というタスクを行うという優れた授業展開を見せた。作品選択も極めて適切である。韻文作品の難しさは語数の少なさという利点と引き換えに一語一語の象徴性が高まり結果として難解さが増すことであるが、本作品には特に注意を払うべき押韻等もなく、拙稿でみたポーの実例⁴³のように教師側に特別な知識が要求されない点でも中学3年生向けの教材として高い潜在性を見ることができる。ただし一点注意すべきは上述のような分析は極めて「散文的な」アプローチであると

いうことである。換言すれば内容重視に尽きているということである。無論韻文散文問わず文学作品の受容には内容を重視することは言うまでもないが、フィクション・ノンフィクションの別を問わず現行の検定教科書でもテキストとしては散文が圧倒的な割合を占める中であえて韻文作品を教材として用いるならば、その特色を十二分に展開させたいということである。まずは詩として十分にその韻文性を味わわせることから始めるべきである。具体的にはテンポや調性にも例えられる音楽性を、朗読を聴き自ら音読させることで韻文作品を教材とすることの独自性を体感させたい。

2.14. “The Defeat of the City” (1908)—「ただの男」への道のり

O. Henryの、既に用いられた作品と比すれば知名度は落ちるが微笑ましい作品である。全7時間の7時間目、テキストはオリジナル⁴⁴を用いる。都会に出て成功したロバートは知り合った女性アリシアと結婚、故郷に帰るが家族や昔の仲間との邂逅に、田舎出身の地が出てしまう。失敗したと嘆くロバートにアリシアは人間味を感じて「わたしは紳士 (gentleman) と結婚したと思っていたけれど、より良い何か、人間 (man) と結婚したのね」と述べるハッピーエンドの作品である。O. Henryの原文の難しさはすでに述べているところであるが、本作は比較的読みやすい。それでも夏を擬人化して述べる部分やのぼせ上がるロバートの様子を “the rustic mania possessed him unabatedly” と描写する箇所などは、独特のものである。特に後者は “The Gift of the Magi” におけるペラの描写 “an ecstatic scream of joy” “a quick feminine change to hysterical tears and wails” 等とも通じるものであろう⁴⁵。本時のタスクは「呼び方の違い (a gentlemanから a manへ：筆者注) からアリシアの気持ちの変化を考えてみよう」というものであり、その好意的反応に鑑みて「ありのままの自分を見せてもひとは意外に受け入れてくれる」という教師側のまとめで模擬授業は閉じられた。この「ありのままの自分」というところがジェンダー・セクシュアリティにおける、例えば自分自身の性のあり方ということにも解釈可能というところで本授業のテーマに合致させるものとした本グループであったが、本作からいきなりジェンダー・セクシュアリティ問題のテーマを引き出すことは難しい。今年度は非常に多くのO. Henry作品が教材として選ばれたが、それぞれに特色があり、性の教材としては用いにくいものもあるということである。ただしある生物学的には男性とされる人物の属性がgentlemanからmanに変わるという点への注目はジェンダー・セクシュアリティ問題と不即不離のアイデンティティ・ポリティクスにおける問題設定ではあるのであり、本グループの試みがむなしなものであったわけでは決してない。そして全く思いがけないことに同日に行われた*The Awakening*の模擬授業を通じて、この「一人の男 (a man)」の問題は再浮上するのである。なお本グループは最初にO. Henryの写真のコピーを黒板に貼って授業を始めた。このことが予想外に視覚上の効果をもたらし、授業に活気を与えたことを付記しておく。

2.15. *The Awakening*(1899)—「ただの女」への難しさ

本年度最後の模擬授業、Cate Chopinの代表作の中編をオリジナル⁴⁶で扱う。良妻賢母たるエドナが知人の息子ロバートと恋に落ちることで女性としての自分に目覚めてゆくという点は文学性や分量は異なれども “A Story of an Hour” と共通するテーマであり、ともに死という結末を迎えることも同

じである。本グループは一年がかりの全120回計画であり、模擬授業はその110回目、これから学んだ本作を学習発表会で劇としてクラスで上演するという想定の下に行われた。120回の冒頭1・2回では映像化された本作を見せて大まかな内容をつかませ、子細な内容分析に入ってゆく案である。作品の最終場面を扱う模擬授業では「エドナのとった行動について考えよう」というタスクのもと、結果的に入水自殺となる海へのエドナの「帰郷」を議論するものであった。妻は母という関係性の中での役割存在から自己そのものすなわち「ある女性 (a woman)」に戻るためには海に入るしかなかったという授業展開がなされたが、ではなぜ海なのかという疑義が筆者から発せられた。エドナの行動を自殺行為とするとして、他の自殺手段も数多ある中で海というイメージが持ち込まれていることには、文学における海と母性ないし女性性との密接な連関が見られることを確認したのである。これはCarverの“Margo”においてやはり海に行く積み荷というCargo/cargoのイメージが受動的な女性性に絡められていたことと連関する。ここまで模擬授業と受講者全員を含めた議論が進んだところで、女性が「ありのままの自分」すなわち妻でも母でもないただの女性になるためには死を賭さなくてはならないというテーマに改めて向き合うときに、同日行われた前掲2.14のO. Henry “The Defeat of the City”におけるロバートのa manへの変容が持ち出されたのである。すなわち関係性の中でのみ存在を許されているといっても過言ではない*The Awakening*の女性表象に比して“The Defeat of the City”のロバートはかくもやすやすとa manに戻ることができ、かつそれが幸福に周囲にも受け入れられて葛藤に苦しむことも死ぬこともない。“The Defeat of the City”の段で「ありのままの自分を出すこと」が担当グループから提示されたことを示したが男女間において、その達成の如何にはすさまじいまでの差があることがいみじくもこの、同時代の作家二人 (Chopin 1850-1904、O. Henry 1862-1910) によって書かれた二作品が同日に偶然扱われることで提示されたのである。

3. おわりに

今日の英語教育の現場において文学が教材として扱われることは加速度を増して減じつつづけている。しかし人間の存在意義を深く掘り下げる文学であるからこそ個々人の抱える種々の問題に与える解決方法もあるのであり、より実践的なところで言えば、すでに序論でみたように学んでいる言語圏の文化表象として文学は言語教育と密接にかかわりあっているものでもある。日本の文部科学省によっても自国の文学はグローバル化対応に必須のものとして位置付けられている⁴⁷。ぜひ英語教育教材としての可能性を今後とも発展的に探索してゆきたい。2016年度の鹿兒島大学における「英語科指導法II」では例年になくHemingwayとO. Henryの作品が多く選択されたが—“Indian Camp”は二回採択された—このことから同じ作品に対して取られうるアプローチの多様性ととも、これからの英語教科書作成などの場面におけるこれらの作家と作品の教材としての有効性が引き出されるであろう⁴⁸。その際に義務教育の最終段階でありアイデンティティ形成における最重要要因の一である「性」について日々重大な岐路に立たされている中学3年生という時期の英語教育において、上述の理由による文学教育と併せ性教育、この三分野のクロスジャンルを筆者は提唱するものであ

る。2020年度からは小学校でも英語が教科化され⁴⁹、グローバル化対応の掛け声のもと英語教育の重要性は名実ともに増すばかりである。その際の鍵概念は「多様性」である。きわめて現実的な一例としては、2020年東京オリンピックに向けてセクシュアル・マイノリティとされるLGBTにも対応可能な宿泊施設の必要性の顕在化⁵⁰など、現在の日本社会においてグローバルと多様性を考える際に、男性/女性であるとは何かということからカッコ付きの「セクシュアル・マイノリティ」の問題まで、人間のあり方に広くかかわっている「性」は格好のテーマとなるのである。1970年代「個人的なことは政治的なこと」のスローガンのもと世界的なリベラル・フェミニズム運動が躍進したように、個人のアイデンティティにおける性の問題は、同時に絶えず公的な干渉にさらされるものでもあり、それが日ごと社会の多種多様な側面において可視化しているのが今日の状況と言えよう。英語、文学、性、いずれも多様性の学びに大変適したトピックであり今まさにそれぞれの領域が重要視されている中、もう一歩進んでそれらの領域のクロスジャンルの試みを今後も探ってゆきたい。

注

¹ Joanne Collie and Stephen Slater, *Literature in the Language Classroom: A resource Book of Ideas and Activities* (Cambridge: Cambridge UP, 2000), 2.

² 千代田夏夫「高等教育における中等教育指導法のあり方—教材としての米国文学とジェンダー・セクシュアリティ問題を通して—」『鹿児島大学教育学部実践研究紀要』第25巻（2016）、117-32頁。117頁参照。

- ³ 教職に関する科目として教育職員免許法に則って開講される。
- ⁴ 『中学校学習指導要領平成20年3月告示平成22年11月一部改正』文部科学省（東山書房、2011）『中学校学習指導要領解説外国語編』平成20年9月（開隆堂出版株式会社、2011）。
- ⁵ http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm 2016/8/17 確認。
- ⁶ <http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai.html> 2016/8/17 確認。
- ⁷ 「学校で大「恥ずかしい」→全部個室にします」カナロコby 神奈川新聞 2016年6月11日
<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20160611-00009813-kana-114> 2016/8/17 確認
- ⁸ 2016年8月5日産経ニュース <http://www.sankei.com/affairs/news/160805/af1608050015-n1.html> 2016年8月15日確認。2016年8月5日時事ドットコムニュース「「同性愛暴露され自殺」=両親が一橋大と同級生提訴—東京地裁」
<http://www.jiji.com/jc/article?k=2016080500795&g=soc> 2016年8月15日確認。
- ⁹ F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (Herdfordshire: Wordsworth Classics, 1993), 3-4.
- ¹⁰ F・スコット・フィッツジェラルド『*The Great Gatsby* グレート・ギャツビー [新版]』(IBCパブリッシング株式会社、2012年)、3-4頁。
- ¹¹ F・スコット・フィッツジェラルド『*The Great Gatsby* グレート・ギャツビー』(IBCパブリッシング株式会社、2006年)、3-4頁。
- ¹² 千代田(2016)、119頁参照。
- ¹³ Clarea Hotze、上山政義『*O. Henry's Short Stories*』(中央図書、1985年)、22-34頁。
- ¹⁴ homosocial の概念についてはイヴ・K・セジウィック『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀澤美由紀訳(名古屋大学出版会、2001年)参照。
- ¹⁵ 千代田夏夫「中学校英語教育教材としての米国文学作品—大学学部教育におけるテキスト選定作業を中心に—」『鹿兒島大学教育学部実践研究紀要』第23巻(2014)、95-102頁参照。
- ¹⁶ Shaun Gates『*O・ヘンリーの世界2 三博士の贈り物他1編*』(美誠社、2002年)、29-43頁。
- ¹⁷ 千代田(2014)、96頁参照。
- ¹⁸ Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*, retold by John Escott (New York: Oxford UP, 2008).
- ¹⁹ 千代田(2016)、123頁参照。
- ²⁰ 日本ヘミングウェイ協会第23回全国大会(2012年12月)ではワーク・イン・プロGRESS「*In Our Time* におけるセクシュアリティの表象」(萩野智美)において本作の同性愛的解釈が試みられた。『ヘミングウェイ大辞典』(勉誠出版、2012)では本作の項に「短編集『われらの時代に』では、続く「三日吹く風」に後日談が展開され、ビルが再度登場し、いわばホモソーシャルな世界がより快適なであることが呈示される」(長谷川裕一)との指摘がなされている。
- ²¹ 強制的異性愛についてはその語が一般に広まる契機を作ったAdrienne Rich, “Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence” (1981) in *Blood, Bread, and Poetry* 1979-1985 (New York and London: W.W.Norton & Company, 1986) をまずは参照するべきであろう。
- ²² 瀬名波栄潤「男らしさの神話と実話—ニックのキャンプの物語」日本ヘミングウェイ協会編『アーネスト・ヘミングウェイ—21世紀から読む作家の地平』(臨川書店、2011年)、58-75頁。
- ²³ Rachel Bladon, *Daisy Miller: Pre-intermediate* (London: Macmillan Education, 2007).
- ²⁴ ジェイムズ作品におけるヨーロッパとアメリカについては渡辺利雄『講義アメリカ文学史第II巻』(研究社、2007年)92-94を参照。
- ²⁵ 上田和夫編『イギリス文学辞典』(研究社、2004年) romance の項参照。「ロマンスの非現実性、騎士道物語のマナリズムに対する諷刺がChaucerのあたりから始まり、やがて17世紀に入ってCervantesのDon Quixoteにより決定的な打撃を与えられる。この版ロマンス精神はイギリスではpicaresque 小説と一緒に受け入れられ、Defoe以来のリアリズムと結びついて、イギリス小説の主流を形成した」(301)という記述は、英国におけるnovel米国におけるromanceという文学表象上の二項対立と併せて留意すべきであろう。
- ²⁶ 千代田(2016)、121-22頁参照。
- ²⁷ Ernest Hemingway, *The Killers and Other Stories*, eds with notes by Tsuguro Takatani and Masahiko Ohmura (Tokyo: Nan'un-Do, 1960), 21-25.
- ²⁸ ロマンティック・ラブ・イデオロギーについてはデビッド・ノッター『純潔の近代 近代家族と親密性の比較社会学』(慶応義塾大学出版会、2007年)、4頁など参照のこと。
- ²⁹ 千代田(2016)、127頁参照。
- ³⁰ Kate Chopin, “Story of an Hour,” in *Kate Chopin: Complete Novels and Stories* (New York: Literary Classics of the United States, Inc., 2002), 758-58.
- ³¹ 諏訪部浩一責任編集『アメリカ文学入門』(三修社、2013年)、78-79頁。
- ³² 千代田(2016)、125頁参照。著作権については充分注意したい。
- ³³ https://www.youtube.com/watch?v=9C7Q8N_IXo8 2016/8/13 確認。
- ³⁴ Ernest Hemingway, *The Short Happy Life of Francis Macomber, and Other Stories* (London: Penguin Books, 1963), 126-29.
- ³⁵ 藤井健三・安達秀夫『現代アメリカ二大作家編』(三修社、1982)、1-6頁。
- ³⁶ 千代田(2016)、130頁参照。
- ³⁷ http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/files/2014041000064/2014041000064_www_pref_kochi_lg_jp_uploaded_life_1042_54_396749_misc.pdf 2016/8/14 確認。
- ³⁸ 塚田幸光は自然=女性、ナイフ=白人権力/男根という読み替えをもって「この出産はレイプの象徴的光景にもなるだろう」と論じる。『ヘミングウェイ大辞典』「インディアン・キャンプ」の項。
- ³⁹ 千代田(2014)、100頁参照。

⁴⁰ 藤井・安達、1-6 頁。

⁴¹ 中野学而「ジェンダー」『アメリカ文学入門』274-77 頁。なお同じ 1920 年代アメリカ白人男性の男らしさへの揺らぎに関しても、注²²の瀬名波論文など、グループごとに異なる研究資料を探索・使用したことはジェンダー・セクシュアリティ研究への手がかりの多さを示すものであり、大いに評価すべきである。

⁴² Raymond Carver, *A New Path to the Waterfall: Poems Introduction by Tess Gallagher* (New York: The Atlantic Monthly Press, 1989), 85.

⁴³ 千代田夏夫「中等教育英語における、米国文学とジェンダー・セクシュアリティ—高等教育での教材選定と模擬授業を通して—」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第 24 巻 (2015)、103-18 頁、107-108 頁、113-114 頁、117 頁参照。2014 年度本科目では Poe の“To My Mother”“To F-”“To Helen”の三つの詩が選択された。

⁴⁴ <http://americanliterature.com/author/o-henry/short-story/the-defeat-of-the-city> 2016/8/17 確認。

⁴⁵ 千代田 (2014)、101 頁参照。

⁴⁶ Cate Chopin, *The Awakening* (New York: Harper Collins Publishers, 2011).

⁴⁷ 千代田(2016)、117 頁参照。

⁴⁸ Hemingway の大学学部英語教材としての適性については Pavloska が論じておりであるが、中等教育における可能性も主張したい。“Indian Camp”には JACET レベル 0 以上の語彙が 14 語しかないという指摘にも留意したい。Susanna Pavloska 「ヘミングウェイの短編を用いたラジオプレイの試み」吉村俊子・安田優ほか編『文学教材実践ハンドブック—英語教育を活性化する—』(英宝社、2013)、162-70 頁参照。

⁴⁹ 産経ニュース 2016 年 4 月 13 日 「[教育動向]2020 年度からの小学校英語増加分は朝や土曜日、夏・冬休みに!？」
<http://www.sankei.com/life/news/160413/lif1604130024-n1.html> 2016/8/15 確認。

⁵⁰ 河野祥平「東京五輪で試される日本の LGBT 対応—我々は五輪憲章に沿った“おもてなし”ができるのか」2015 年 8 月 26 日日経ビジネス ONLINE <http://business.nikkeibp.co.jp/atcl/report/15/082000028/082500003/> 2018/8/14 確認。日本経済新聞朝刊コラム「春秋」2016 年 7 月 4 日における「××国での勤務を命ず」。そんな事例を言い渡した時、部下が尻込みしたとする。上司はこう思うだろうか。「若い世代の内向き志向か？」-中略-世界には同性愛を今も犯罪とし、時に死刑を科す国もある。そうした国にしばらく住めと言われれば悩んで当然だ-中略-米国企業の動きは速い。少数者の権利保護。社内での理解者の育成。そうした取り組みに熱心な企業であるとうとう広告。多様性が組織の強みになり、外の目にも魅力として映ると理解しているからか-後略- (強調筆者)も示唆に富む。

